田園調布学園大学

処理	学　長	副学長	副学長	学部長	学部長	事務局長	学科長

受付

学　　長　殿

令和8年　　5月　 7日

令和7年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

学科、委員会等：　共生社会学科

申請（代表）者：　新名正弥　印

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）

該当番号 対象の取組

④	アクティブラーニングなど学生の主体的・能動的な学修態度を養う教

1.取組の名称

質的調査を通じた学生主体性と共創「知」獲得に関する実践

2.取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを〇で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

（個人）	組織	

3.取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

(江島ゼミ)下記に示す計5箇所の施設見学・インタビュー調査、ならびに調査報告会を行った。
3年ゼミ＝6月：社会福祉法人至誠学園、11月：社会福祉法人新日本学園
4年ゼミ＝4月：川崎市北部児童養護施設、6月：社会福祉法人川崎愛児園、9月：自立支援施設国立きぬ川学院　3・4年合同＝1月：ゼミ内での調査報告会(武山ゼミ)3年生ゼミで、①神奈川県内における公園フィールドワーク及び②学内及び広島における園芸福祉研修を実施した。①については、9月～12月の間、3年生が城ノ腰公園(伊勢原市)、南野川ふれあいの森(川崎市)、谷津坂第一公園(横浜市)、元町百段公園(横浜市)でフィールドワークを実施。各公園愛護会や向上高等学校の生徒たちと公園での維持管理活動に参加するとともに、各公園や公園のある地域の現状や課題について、講義を受けたり関係者等にインタビューを実施したりした。②については、11/5(水)に、横浜市の園芸福祉士を本学にお招きし、園芸福祉的フラワーアレンジメントを実施、また、2/24(火)～2/25(水)には広島県竹原市及び呉市で園芸福祉研修を実施し、ひろしまね園芸福祉協会の園芸福祉士から園芸福祉についての講義を受けた後、社会福祉法人的場会の通所介護事業所(竹原市)で利用者の皆さんとの「花活」を体験したり、呉特別支援学校の生徒たちが実施する市役所(呉市)の花壇整備に参加したり、地域における園芸福祉活動を体験した。(新名ゼミ)「美」を通じた老化に関するテーマについて、①映画鑑賞、②美に関する検討会の、③老化に関する検討会、④インターゼミ(合同ゼミ)に参加、発表を行った。

4.取組の成果

(江島ゼミ)各回の訪問調査において、先行研究の調査、仮説の設定、インタビュー項目を設定した上で聞き取りを行い、調査後には御礼文書発送、文字起こし、調査報告資料の作成を行った。特に、学生にとっては社会調査(質的調査)自体が初めての体験であったため、貴重な取り組みとなった。(武山ゼミ)取組①については、学生たちにとっては初めてのフィールドワークであり、フィールドの選択、フィールド関係者へのファーストコンタクト、実際のフィールドワークの実施、成果のまとめといったフィールドワークの一連のプロセスを自ら主体となって経験することにより、他者とのコミュニケーション能力や課題を発見する能力、問題解決力などが身についた。取組②については、特に広島における研修において園芸福祉を面的に、全体的に体験することを通じて、園芸福祉の知識・技術のソーシャルワークへの応用力を身につけることができたと考える。(新名ゼミ)研究テーマの設定について、自らの問題意識の醸成に努めた。生活から自ら「問い」を発する経験を通じ、どのように問うのかその方法を学んだ。

5.課題・問題点

(江島ゼミ)学生に対してインタビュー調査のトレーニングを入念に行ったため、インタビュー自体は問題なく行うことができた。しかしながら緊張のせいかどうしてもトレーニング通りのインタビューとならず、時間的な制限を超えてしまい、調査対象者に迷惑をかけてしまったこともあった。次年度の課題としたい。
(武山)取組①②ともに様々なことを盛り込みすぎたために、与えられたタスクをこなすのに精一杯で、取組を通じて身につけるべき知識や技術を十分に身につけることのできないゼミ生もいた。また、特に取組①は現在も継続中ということもあり、成果をまとめることとその報告が現時点では十分に行えていない。
(新名ゼミ)学生は文献を読み慣れず、また、情報収集を簡易的に済ませることが多く、問いが深まらないなどの課題がある。本学における学生の資質向上のために、基礎的な学力を欠いている学生に対して、「積極的に取り組む」ことを、どのように伝えていけばよいか試行錯誤を行っている。

6.自己評価

(江島ゼミ)教員引率、学生単独を含めて計5回の訪問調査、ならびに3・4年ゼミの合同報告会を実施することができた。特に、国内唯一の国立かつ少年を対象としている国立きぬ川学院での調査を行うことができたことは、学生間での成功体験としても大きな成果であり、ゼミ内発表会において様々な気づき・発見があったが報告された。
(武山ゼミ)学生の学びが深化したことはもちろんであるが、取組①を通じて神奈川県内の公園愛護会や関係する行政機関、取組②を通じては福祉現場その他の第一線で活躍する園芸福祉士とつながりを持てたことは、今後のゼミ活動や本学における授業の展開において大きな成果といえる。また、取組②における学生の活動は、広島に本拠を置く中国新聞から取材を受け、2026年3月6日の紙面で報道された。社会福祉法人的場会やひろしまね園芸福祉協会のSNS等でもゼミ生たちの活動が紹介され、中国地方でのDCUの知名度を少し上げたように思う。
(新名ゼミ)初年度は学生主体の実査を企画することができなかった。

7.今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

(江島ゼミ)今回の調査報告会資料を印刷・製本した上で、保管管理をしていく。なお、学生主体の本ゼミでの調査は学生の満足度も大きいようであるため、継続して企画・指導していく。
(武山ゼミ)取組①②ともに、まだ活動継続中ということもあり、成果のまとめや報告が完全な形ではできていない。①については、新3年生とともに引き続き活動を継続していくが、できるだけ早いうちに成果を総括し、フィールドワークに協力してくれた関係者を招いて報告会を行いたい。②については、秋口に実施される初級園芸福祉士養成講座への参加、初級園芸福祉士の資格取得へとつなげて完成としたい。
(新名ゼミ)今後は学生が主体的に企画するための企画力向上にむけたゼミ運営と方法を検討したい。

田園調布学園大学

処理	学　長	副学長	副学長	学部長	学部長	事務局長	学科長

受付

学　　長　殿

令和 8 年 5 月 28 日

令和7年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

学科、委員会等：社会福祉学科

申請（代表）者：和　秀俊　印

1.取組の名称

地域に根ざした福祉人材育成戦略

2.取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを〇で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	組織	社会福祉学科

3.取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

5月　沖永良部高校、和泊町社会福祉協議会、知名町社会福祉協議会との打合せ（オンライン）
6月　沖永良部高校、和泊町社会福祉協議会、知名町社会福祉協議会との打合せ（オンライン）
7月　11日（金）17：30から沖永良部高校で医療・福祉を志す3年生を対象に沖永良部島における医療・福祉の仕事の魅力を考える講演会とワークショップを、和泊町社会福祉協議会と知名町社会福祉協議会の協力のもと実施
8月　沖永良部高校および他の地方高校における今後の内容や方法についての検討（メール、オンライン）、東急（株）との学生寮の検討、東京沖洲会との経済的支援の検討
9月　沖永良部高校および他の地方高校における今後の内容や方法についての検討（メール、オンライン）、東急（株）との学生寮の検討、東京沖洲会との経済的支援の検討
10月　静岡東部（伊豆、三島、沼津）、神奈川西部（横須賀）の高校出身の在校生との打合せ
11月　静岡東部（伊豆、三島、沼津）、神奈川西部（横須賀）の高校との打合せ（メール）
12月　通信高校（N校）との打合せ（メール、電話）
1月　26日（月）N校本部（つくば市）に訪問、打合せ、今後に向けての検討
2月　5日（木）緑ヶ丘女子高校（横須賀市）、25日（水）鹿島学園三島キャンパス、知徳学園（三島市）、26日（木）加藤学園（沼津市）に在校生と訪問、打合せ、今後に向けての検討
3月　各実践成果、検討結果の整理、分析、まとめ

4.取組の成果

1.地方高校（沖永良部島高校など）との連携
・沖永良部高校では、来年度は2年生の探究授業の中に本学との連携プログラムを入れて頂けることとなり、和泊町社会福祉協議会と連携して当該地域の福祉について共に考えるプログラムを実施することとなった。
・緑ヶ丘女子高校、鹿島学園三島キャンパス、知徳学園、加藤学園において、高大接続教育のプログラムを一緒に検討しながら、本学への進学にも協力頂けることとなった。
・今後、和泊町社会福祉協議会と協力して、沖永良部島の小・中学校でも、当該地域の福祉ニーズに合った教育プログラムを学校や社協と共同で企画・運営することとなった。
2.受験生の確保
・学生寮があれば、当該地方の高校（沖永良部島高校など）から毎年1名以上、将来福祉の仕事を希望する生徒を紹介しても頂き、本学受験に向けて準備を進めることができることを確認することができた。
3.費用支援策
・受験料や学費・生活費など4年間に必要となる経費については、例えば沖永良部島であれば、和泊町の基金（約1億円）や首都圏在住の沖永良部島高校卒業生らによる同窓会、沖永良部島出身者による東京沖洲会などから寄付を募り、一部を負担することを引き続き検討することとなった。
4.在学中の生活支援
・東急（株）と協力して、川崎市麻生区虹ヶ丘や横浜市青葉区すすき野の団地に学生寮を確保することとなった。
・大学周辺の飲食店やお住まいの方々は地方出身者が多く、沖永良部島などの奄美群島、静岡東部（伊豆、三島、沼津）の出身者もいるため、同郷の在校生や今後入学予定の学生たちの居場所づくりの協力を頂けることとなった。
5.大学としての取り組み
・地方入試の方法や受験料・学費の一部免除、学生寮の確保、オンライン授業を活用したサテライトキャンパスの導入などを引き続き検討することとなった。
6.福祉実習の実施
・将来的に当該地方で就職することを視野に入れ、実習はインターンの要素も含めて主に当該地方で行うことにとても意義を感じて頂き、引き続き検討することとなった。

5.課題・問題点

・沖永良部島や静岡東部などの地方出身の学生を本学に受入れるためには、まずは学生寮があることが前提にないと次の展開に向けた具体的な話ができないという問題点が明確となった。そのため、早急に東急（株）や地元の不動産屋、地主などと学生寮の確保について取り組むことが重要な課題であると思われる。
・今後は、沖永良部島、静岡東部だけではなく、奄美群島、静岡県全体、福島県南部（いわき市など）、茨城県、山梨県などの本学の教職員や地元の方々のゆかりがある地域を戦略的に本プロジェクトを進めていくことが必要であると思われる。
・N校については、本部に本学のことを理解して頂くことはできたが、今後は本学にご縁のあるN校キャンパスにアプローチすることが必要である。
・より多くの社会福祉学科の教員が参加しやすい方法や内容を検討することも必要である。
・費用支援対策については、東京沖洲会などの同郷集団に引き続き検討して頂く必要がある。東京奄美会では奨学金制度があるので、東京沖洲会にも同制度の検討を依頼したいと考えている。
・本プロジェクトのような地方戦略は、大学全体としても迅速かつ具体的に取り組む必要があると思われる。

6.自己評価

・沖永良部高校との高大接続教育については、以前から信頼関係を構築することを心掛けて準備をしていたので円滑に進めることができた。また、令和7年度は医療・福祉に興味がある3年生を対象としたプログラムであったが、振り返りや今後に向けて話し合った中で1、2年生向けのプログラムを検討して頂いた結果、令和8年度は2年生対象の探究授業の中で取り組ませて頂けることとなった。この2年生対象の授業には、和泊町社会福祉協議会が和泊町地域福祉活動計画を活用したプログラムと連動させて一緒に取り組んで頂けることとなった。
・緑ヶ丘女子高校、鹿島学園三島キャンパス、知徳学園、加藤学園を卒業した在校生と一緒にお世話になった先生を訪問して高大接続教育について打ち合わせすると先方の先生方もとても喜んで頂くことができ、今後に向けて積極的に具体的な話をさせて頂くことができた。その結果、訪問同行した学生が出身校と本学の愛着が芽生え、後輩が本学に入学する協力をしたいという気持ちも醸成させることができたと思われる。
・東急（株）とは、虹ヶ丘団地、すすき野団地、その周辺アリアの地域づくりのプロジェクト（Nexus構想）をゼミナール、地域探究などで一緒に取り組んでいる中で、本学や周辺大学の学生が各団地に住みながら地域づくりに参加する仕組みづくりの一環として学生寮の構想を検討し、本プロジェクトと連動させることができた。

7.今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

・沖永良部高校では、令和8年度は2年生向けの探究授業を和泊町社会福祉協議会と連携して取組む予定である。併せて、他の奄美群島（奄美大島、徳之島、喜界島、与論島）にも訪問し関係を構築したいと考えている。
・緑ヶ丘女子高校、鹿島学園三島キャンパス、知徳学園、加藤学園とは、高大接続教育についてできるところから始める予定である。今後は、伊豆、三島、沼津のほか、静岡中部、西部の高校などにも訪問し関係を築く予定である。
・東急（株）と一緒に本学の学生をモデルとして、東急（株）が購入した虹ヶ丘団地の一角をシェアハウス型学生寮として実装実験する予定である。
・東京沖洲会に奨学金制度設立について提案、検討する予定である。
・奄美群島、静岡、福島、茨城など、地方戦略の地域出身者の大学周辺の飲食店、地域の方々の協力頂き、学生が安心できる居場所づくりを充実させたい。
・より多くの教員が参加しやすいように、神奈川県内、都内などのゆかりのある高校でも展開しやすい内容、方法を検討したい。

田園調布学園大学

処理	学　長	副学長	副学長	学部長	学部長	事務局長	学科長

受付

学　　長　殿

2026年 5月28日

令和7年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

学科、委員会等：共生社会学科

申請（代表）者：引馬　知子　印

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）
該当番号 対象の取組

④	アクティブラーニングなど学生の主体的・能動的な学習態度を養う教育

1.取組の名称

持続可能な社会と環境づくりに貢献する大学SDGs実践活動

2.取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを〇で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	組織	引馬知子、國見真理子、仙田考

3.取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

（國見ゼミ）前期後期を通じて、学生主体で川越の歴史的発展や今日の状況に関する事前学習をグループワークや発表を行った。11月の川越への訪問調査では、町並みガイドの説明の下でより深く学び、最終的にには事後学習としてレポートを提出した。12月に社会福祉法人の持続的経営に関するセミナーに参加し、1月に地域医療の持続可能性に関するセミナーとヒアリング調査を実施した。ISTRのウェビナーや報告書を通じてSDGsを巡る国際的活動の情報収集を行った。
（仙田ゼミ）4年次６名の学生と活動を行った。当該学生が２年次授業で東北と川崎のどんぐりを種まき、３年次の専門演習でポット植替えや水やり等の世話を経て、2025年9月に東北のどんぐり苗の植樹会を実施＋2園（岩手県大槌町・奥州市）で種ダンゴ作りを子どもたちと実施した。また2025年10月・12月に川崎市のどんぐりを麻生区内施設（王禅寺四ツ田緑地withみらいこども園・それいゆ保育園）に植樹会を子どもたちと行った。
（引馬ゼミ）ゼミの学生たちが中心となり、①地域の人々と共に創り・集う“共生カフェ活動”の継続実施と、その準備における生活介護施設との協働作業・創作活動、②DCUサスティナブルワークゼミ活動を引き継ぐ、Notサスティナブル「闇バイト」学内啓発活動、③「手をつなぐフェスティバル」等におけるSDGs・福祉活動を実施した。①では、共生カフェを花畑にする創作や、書道とアートを用いた準備を利用者の方々と行い、共生カフェを開いた。②ではポスター等を作成して掲示し、③では地域の福祉の専門家や利用者の方々と共に地域交流活動を実施した。

4.取組の成果

（國見ゼミ）調べ学習と調査の組み合わせによって、学生が地域資源の有効活用や環境負荷低減の具体例を現場で体験し、SDGsの実践理解を深めるなど、学内での学びよりも理解を深めることができた。事前・事後発表を通じて学びを論理的に整理・言語化する力を向上させ、地域社会や医療現場の課題と持続可能性の関係を把握した。国内外のSDGs実践事例を比較することで、国際的視野も広げることができた。
（仙田ゼミ）足掛け3年に渡り、同じ学生が、東北・川崎各地域のどんぐりを種まきからポット苗育成、子どもたちとの植樹（特に本事業費では植樹会の実施）までの一連のプロセスを今回実現することができた。保育・教育を学ぶ学生自身が自然保育の充実を目指し、子どもの遊び場やまちへの植樹を通して自然環境を豊かにする環境構成を子どもたちとともに実践できたことは、自然・保育・教育・環境づくりを学ぶ貴重な機会になったと考える。
（引馬ゼミ）学生たちが主体的に話し合うなかで、実践活動の企画と準備を行い、ひとり一人が役割を担って協力し活動を完成させることで、講義での学びとは一味違うアクティブな学修上の達成を得ることができた。共生社会カフェ活動やSDGs・福祉活動を通じて、学年を越えたつながりや学外の多様な人とのつながりがうまれ、現在の社会問題をさらに理解し、共生社会の実現や持続可能な社会のあり方について実践を交えて考える機会となった。

5.課題・問題点

（國見ゼミ）学力差が多かった昨年度に比べると、全体的には能動的な学びを志向する学生が多かったものの、学生による調査成果を地域活動や具体的行動計画につなげていく効果的な仕組み作りが課題である。
（仙田ゼミ）東北震災復興のどんぐりプロジェクト（NPO法人子どもの森づくり推進ネットワーク：東北復興グリーンウェーブ）は、2025年度を持って、東北のどんぐりの送付が終了したが、川崎のどんぐりは今後も王禅寺四ツ田緑地等で実施したい。ただし附属みらいこども園の子どもたちとどんぐり拾い、植樹会を実施できたが、今後こども園が園外保育の場所を変更の可能性があり、子どもたちとの活動継続が難しい可能性がある。
（引馬ゼミ）いくつかの活動について、３，４年にわたり実践を継続しているものの、学外との連携が進むにつれて、すべての声掛けに応えきれない状況がある。このため、年度を越えて計画していくことが必要な場面があり、今後は中期的な視点をもって、これまで積み上げてきた活動や今後の可能性について整理したり、記録に残すと作業を試みていくことが、積極的な活動をする上て求められていると考える。

6.自己評価

（國見ゼミ）学生主体の体験型学習により、SDGsや地域共生に関する理解を着実に深めることができた。現場視察と発表を組み合わせた学習設計は効果的であり、今後は調査成果を地域活動や学内外の研究プロジェクトに反映させることが望まれる。
（仙田ゼミ）前述のとおり、同じ学生が足掛け3年に渡りどんぐりの種まきから育成、植樹までのプロセス全体を体験できたことは、関わった学生にとって大きな学び、気づきがもたらされたと考える。また本プロジェクトでは、附属園や地域・地方の園、自然環境施設、環境NPO等、様々な団体・ネットワークとのつながりやご協力を通して実現できたことも貴重かつ意義ある活動になったと考える。
（引馬ゼミ）福祉等の専門家、福祉施設の利用者、実践家、地域の人々等と協働することで、学生たちの地域や社会への理解、専門職への理解等が深まり、そこから将来の方向性や就職を決めた学生も多かった。自らが主体となって他者と協調性をもって実体ある成果を生む活動が、学生たちの自信とコンピテンスの向上につながった。

7.今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

（國見ゼミ）学生が能動的に自発的に物事を学ぶ姿勢を身に着けられるように教員が助言・指導していく予定である。成果については、授業内外でのフィードバックなど可能な限り社会還元できる機会をもつように努めていきたい。
（仙田ゼミ）学生自身が自然保育・環境教育を充実を目指して環境整備に関わる機会は重要と考える。今後も川崎のどんぐりプロジェクトを継続していきたい。また活動成果を大学HP等で紹介報告も継続したい。
大学HP「どんぐりプロジェクト（東北と麻生区のどんぐり）続報その２」 学生が育てた東北のどんぐり苗を東北被災地に植樹しました https://www.dcu.ac.jp/school/child/future/news_detail.html?CN=270782 他
（引馬ゼミ）学生たちが大学内外で多様な人々と連携を図り共生社会やSDGｓに寄与する実践を積み上げることは、本学の教育理念にもそって重要となる。このため、現在活動を行う学生が次世代の学生にその内容を引き継げるよう、また卒業後も同様の活動に関わり連携できるよう、支援やネットワーク化を行っていく予定である。

田園調布学園大学

処理	学　長	副学長	副学長	学部長	学部長	事務局長	学科長

受付

学　　長　殿

令和　8　年　5月　31日

令和　7　年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

学科、委員会等：子ども教育学科

申請（代表）者：吉國　陽一　印

1.取組の名称

黒川野外活動センターにおけるチームビルディングを目的とした諸活動

2.取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを〇で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	〇組織	子ども教育学科(基礎演習Ⅰ担当)

3.取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

本事業は初年次教育におけるチームビルディングの実践の一環として、黒川野外活動センターにおいて学生間の協力を基盤とした諸活動を実施することを目的とした。
子ども教育学科(旧子ども未来学科)における近年の学生の傾向として、人間関係を形成する力が低下し、学業においても友人以外の学生との協力関係を築きにくくなっているという問題がある。保育、教育、福祉といった分野での就職が見込まれる学生にとって、適切な同僚性を構築しながらチームで業務を遂行するということが職業人としても必須となる。本事業はそうした状況を踏まえて考案したものである。
土曜特別授業として黒川野外活動センターにおいて実施した。授業は前半、後半2つのパートに分かれた。
前半は黒川野外活動センタースタッフの指導の下、チームで食事作り(ピザ作り)を行うことを通してチームワークを高めるとともに、できた食事を一緒に食べることで学生間の関係性を深めることを目的とする。食事作りにあたっては当日までの間にもどのような食材をのせたいかなど、チーム毎に相談し、意見を出し合いながら計画するプロセスを重視した。
後半は黒川野外活動センターの雑木林の環境を整備するネイチャーボランティア活動を実施した。前半と同じく、共同作業を通してチームワークを高めることを重視した。

4月26日(土)

4.取組の成果

本事業の成果は以下の2点に集約される。

①　新入生間の関係性構築及びアドバイザー教員との関係性の構築
入学当初の新入生は互いのこともよく知らず、新しい環境の中で友人ができるかどうかを含めて不安に思っている状況にある。こうした中で食事作りやゲーム、ボランティア活動を通して新入生同士の関係性が築くことができたことでその後の基礎演習Ⅰの授業のみならず、その他の授業における協同的な学びによい影響があったといえる。また、アドバイザー教員も野外活動をともにすることを学生個々の特徴や学生間の関係性を把握することができ、関係性を深める契機ともなった。

②　目的を共有し、協力する力の育成
チームビルディングの本義は目的を共有するチームにおける協同である。本事業は黒川野外活動センタースタッフの指導の下、特定の目的をもった活動を学生同士が協力して遂行することを企図して計画されていた。そうした活動を通して協同して目的を成し遂げることの達成感を得ることができた。また、他者と協同するために必要とされるソーシャルスキルを会得することができたことはその後の授業によい影響を与えたといえる。

5.課題・問題点

本事業の課題として、一日の活動で終わってしまうため、チームビルディングの成果が持続しづらいということが挙げられる。学生間の関係性はどうしても個人的な仲の良さに左右される。野外活動の中でで培われた協力関係もその後の学生生活の中では持続させることが難しく、個人的に仲の良い友人との関係性だけが残りがちになる。「基礎演習Ⅰ」は新カリキュラムで新設され、通年で15回の科目である。旧カリキュラムの「基礎演習」は通年で30回であったため、毎週のように授業が行われており、学生間の関係性を深める上では好都合であった。「基礎演習Ⅰ」は毎週授業が行われない中で、野外活動の中で培われた関係性をその後いかにして持続させるかが課題となる。

6.自己評価

本事業は当初企図した成果を概ね達成できたといえる。野外活動の中で生まれるコミュニケーションや協力は座学の中で生まれるものとは質が全く異なるものであり、本事業によって切り開かれたものであるといえる。「4. 取組の成果」で記したような成果を得ることができたのは、野外活動ならではの楽しさや開放感があってのことであったといえる。「5. 課題・問題点」に挙げたような課題は残るものの、それは「基礎演習Ⅰ」のカリキュラム全体に起因するものであり、本事業としては当初の目的を十分に達成したといえる。

7.今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

本事業は令和8年度は学科予算に組み込む形で継続を図っている。新カリキュラムでは「基礎演習Ⅱ」が2年次に通年15回の形で「基礎演習Ⅰ」との連続性の中で置かれている。そこで、令和8年度は黒川野外活動を「基礎演習Ⅰ」のみならず「基礎演習Ⅱ」の中にも組み込むことにより、1年次の野外活動の中で培われた学生間の協力関係を2年次でさらに深化させることを企図した。また、「基礎演習Ⅰ」、「基礎演習Ⅱ」双方の活動の中で引き続きチームビルディングという課題を意識した活動を継続していくことで黒川野外活動におけるチームビルディングの成果の持続につなげたい。

田園調布学園大学

処理	学　長	副学長	副学長	学部長	学部長	事務局長	学科長

受付

学　　長　殿

令和８　年　　５月　　21日

令和　７　　年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

学科、委員会等：人間科学部　心理学科

申請（代表）者：　長岡　智寿子　印

１.取組の名称

「負の遺産」から学ぶ：「平和学習」フィールドワーク

２.取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかをﾏﾙで囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	組織	人間科学部　心理学科　長岡　智寿子

３.取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

「平和な社会」とは、どのような社会のことをいうのだろうか。「平和な社会」について模索することは、貧困や差別、障がい等により周辺化されてきた人々との連帯の重要性を理解することの他、人権の観点からも多様性が尊重される社会の実現に向けて、自ら考えていくことが欠かせない。また、その創造に向けた実践は、SDGsの達成を目指す活動に他ならない。本プロジェクトは昨年度、実施した教育改善事業をさらに発展させ、「平和学習」をキーワードに、「社会教育士」を目指す学生らの主体的な学びの機会を促進することを目的とし、取り組むものである。以下、実施に向けての具体的概要は次のとおり。①平和な社会の創造のために歴史的事実の理解、　②社会の構成員としての肯定的な価値観、倫理感の育成、③社会における多様な価値、及び、人権の尊重を念頭に、「社会教育士」の養成に向けて実施する。スケジュールとしては、長岡ゼミの学生、及び、社会教育実習の履修者（15名）を対象に、7月から9月の夏期休暇中を中心に取り組んだ。4年、3年と合同で実施するフィールドワークは8月に実施。

４.取組の成果

今年度の活動実績は活動内容：
社会教育実習の活動として日本国内の戦争遺跡（日吉台地下壕）や明示大学平和教育登戸研究所資料館等の訪問、見学の他、今年度は、3年生と合同で長野県下伊那郡阿智村満蒙開拓平和記念館を訪問した。参加者は教員2名を含め、23名（1名欠席）であった。
2025年8月6日、7時45分に新宿駅に集合し、上諏訪駅まで電車で移動。その後、上諏訪駅からマイクロバスにて満蒙開拓平和記念館まで移動した。現地（満蒙開拓平和記念館）では、かつて満州から引き上げてこられた方が語り部として活動されているとのことであり、我々の訪問に合わせて調整いただいた。ご高齢のためにご体調等の懸念事項もあったが、当時の記憶とともにご講話いただいた。また、当館の寺沢館長からも丁寧に当時の記録、資料をもとにご説明いただいた。学生らを含め、戦後生まれの世代の我々にとっては、「戦争」とは歴史の一部となり、もはや、「戦争を知らない世代」が中心となる今日である。そのような中で、あえて、【「負の遺産」から学ぶフィールドワーク】に取り組むことの意義を参加者全員が実感したのではないか。

５.課題・問題点

8月のフィールドワークは阿智村までの移動手段が限られていることからも、早朝に集合し、現地での充分な時間が確保できなかった。行程は次のとおり。
8月6日　往路：特急あずさ5号　新宿（8：00発）～上諏訪（10：12着）、復路：上諏訪（19：03発）～新宿（21：17着）　参加学生からは、自費でも宿泊を希望する声も上がり、今回のフィールドワークに対し、意欲的な姿勢が垣間見られた。　本プロジェクトの主要なねらいは、学生が自ら主体的に学び、考えていく機会を促していくことである。次年度以降も可能な範囲で継続して取り組み、また、企画段階から学生らの積極的な参画を期待していきたい。

6.自己評価

本プロジェクトの実施により、企画段階からのねらいとして、以下の成果が期待できる。

・「平和」を求める価値観、倫理感について、自ら問い続ける姿勢を養えること。
・SDGｓの理念への理解のみならず、具体的な実践から学ぶ機会となること。
・「異なる他者」との共生や社会における多様な価値の存在について理解すること。
・実際生活における問題解決に向けて、自らの見解を体験を踏まえて表現できるようになること。
・本学におけるディプロマポリシーである「共生」について、より理解が深まること。
・本プロジェクト終了後も、学外の関係者との緩やかなネットワークの構築が期待できること。

7.今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

昨今の物価高も懸念されることから、交通費も含め、学外でのフィールドワークにおける費用面での課題が危惧される。しかし、学生と共に移動する際の交通手段や経路などは、何よりも安全の確保が最優先となる。社会教育士を目指す学生らの様相も学年により様々ではあるが、社会教育主事課程を担当する教員間にて検討しつつ、これまでの活動を踏まえ、是非、次年度以降も学生らの主体的な学びの機会を継続して創っていきたい。